カラスよりも賢く

被害軽減のヒント

鳥害の中でも最も農業被害が多いとされるカラス。持続的な対策には、カラスの生理・生態を理解することが重要となる。宇都宮大学発ベンチャーとして、学術的根拠に基づく被害対策を提案する株式会社CrowLab（クロウラボ）から、知っているようで知らないカラスの生態について解説してもらう。

▽　▽

2018年度のカラスによる農作物への被害金額は14億円である。鳥獣害全体の中ではシカ、イノシシに次いで第3位であり、鳥類では断然トップだ。被害の内訳を見ると、商品価格の高い果実への食害が占める割合が多い。ただ、カラスは雑食であり、トマトやキャベツなど、あらゆる農作物に被害がある。また、収穫期までほど遠いスイカやキャベツをちょっとずつ突くなど、食べる目的とは思えないイタズラと呼べるような行為による被害もある。

さらに金額として計上されない被害も多い。例えば、畜産農家への被害として、家畜の餌の盗み食い、ラップサイレージのラップを突いて腐らせる、家畜の身体を突くなどが挙げられる。畜産農家が最も憂慮するのは、カラスによる家畜伝染病の拡散だろう。サルモネラ症が発生した牛舎で出入りするカラスからサルモネラが検出された例がある。

①被害と対策の現状

〝カカシ効果〟に落とし穴も

警戒心が強いのもカラスの特徴

収穫前に加害されたリンゴ

このような被害に対し、カラスの死体を模したおもちゃや、カラスが嫌がることをうたった光・電子音を発生する装置など、さまざまな対策製品があるが、その多くはカラスの生理・生態を無視しているため効果は限定的である。

カラスは警戒心が強い動物であり、目新しい物があると、とりあえず近づかないという行動を選択するため、多くの対策製品で一時的な忌避効果は認められる。伝統的な鳥獣害対策である「カカシ」による効果と原理は同じであるため、著者らは、この一時的な忌避効果を「カカシ効果」と呼んでいる。

対策製品の中には、この「カカシ効果」の映像などを見せることで、効果をうたうものもあるが、カラスは賢く、慣れてしまうため、やがて効果はなくなる。対策製品を購入したものの、設置後すぐに効果がなくなり、残念な思いをされた方も多いのではないだろうか。

（塚原　直樹＝株式会社CrowLab代表）